

5 畜 産

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 厳寒期の畜舎環境対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○厳寒期の畜舎環境対策</li> <li>○踏込消毒槽の消毒薬の凍結防止</li> </ul> <p>1月に引き続き2月も夜間・早朝の冷込みが厳しい。保温を優先して畜舎換気を控えがちになるが、換気が不十分だと湿気や二酸化炭素、ふん尿から発生するアンモニアガス等が溜まり、これらが家畜の喉や器官の粘膜を傷付けることがある。こうなると家畜の免疫力が低下し、ウイルス等に感染しやすくなり呼吸器系疾患を発症する可能性がある。また、十分な換気が行われず汚れた空気が畜舎内に滞留すると、ストレスなどから家畜の生産性が低下するばかりか、管理者の作業環境悪化にもつながる。このため、外気温が低い厳寒期であっても、下記の対策をしっかりと行いながら日中の暖かい時間を見計らって、適切に換気することが重要である。</p> <p>ア 寒風の遮断と適正な換気</p> <p>換気のために窓やカーテンを開けた際、畜体に直接寒風が当たると体温の低下を招き、特に寒さに弱い幼畜では、風邪や下痢を誘発することがある。畜舎側面には、家畜が寒風にさらされない高さまでシートやコンパネ等の風よけを設置し、畜体にあたる寒風を遮断できる準備をしておく(上図)。この風よけは、すきま風の侵入対策も兼ねているため、適切に設置されているか常に確認し、破損等があればただちに修繕しておく。</p> <p>イ 敷料の状態確認とこまめな交換</p> <p>おがくず等の敷料がふんや尿で汚れて濡れた状態が続くと、家畜の体温を奪うと同時に、アンモニアガス等の発生を助長し衛生環境の悪化を招く。よって、敷料の交換は通常よりも早めに行い、乾燥し清潔な状態を保つようにする(写真1)。そして、厚く敷い</p> <div data-bbox="938 1093 1385 1429" data-label="Diagram"> </div> <p>図1 寒風を遮断する換気模式図</p> <div data-bbox="954 1688 1369 1966" data-label="Image"> </div> <p>写真1 乾燥したオガクズを厚めに敷いた牛舎</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 踏込消毒槽の消毒薬の凍結防止</p>	<p>た敷料は、保温効果が期待できるため、おがくずを多めに投入したり、おがくずの上に稲わらを重ねたりして、ふかふかの状態になるよう心がける。</p> <p>ウ 保温器具の活用</p> <p>換気により一時的に畜舎内温度が低下する。寒さに弱い幼畜等には、あらかじめ家畜用コルツヒーターの準備や子牛用防寒ジャケットを着用する等の防寒対策を行うなど、畜舎内の保温環境を整えておくことが望ましい。</p> <p>本県の山間部等では、畜舎外側に設置した踏込消毒槽の消毒液の凍結が想定される。夜間、早朝の時間帯は消毒槽を畜舎内に入れておくことは対策の一つとして有効である。やむを得ず畜舎外側に置く場合は、畜舎の屋根やひさしの下を選ぶとともに、下記の対策により凍結を防止する。</p> <p>ア 踏込消毒槽の蓋の設置</p> <p>雨や雪の混入防止も兼ねて、消毒槽にフタ（コンパネ等）を被せる工夫も有効である（写真2）。雨や雪の混入による消毒薬濃度の希薄を 방지、泥など有機物の混入による消毒効力の低下を抑制するなど、フタの設置は凍結防止以外の役割も大きい。</p> <p>イ 凍結防止剤の活用</p> <p>さらに冷え込むことが予想されるときには、自動車用の不凍タイプのウインドウォッシャー液等を凍結防止剤として、消毒液と混合する方法もある（次ページ表）。ウインドウォッシャー液の使用にあたっては、次の事項に注意する。</p> <p>①原液は引火性や揮発性等があるため、取扱いに注意して、水と同量を混入する。</p> <p>②消毒薬は、先に水に溶かしてから、ウォッシャー液と混合する。</p>



写真2 消毒槽の蓋の設置

表 踏込消毒槽に利用できる凍結防止剤（北海道十勝家畜保健衛生所資料より）

凍結防止剤	使用方法	使用する消毒薬
自動車の不凍タイプの ウインドウォッシャー液 (主成分がメタノールに 限る)	規定濃度の消毒液を作る 希釈水の半分量を凍結防 止剤に置き換える（凍結 防止剤の濃度が約 30%、 約-10℃まで有効）。	複合次亜塩素酸系、 塩素系、逆性せっけ ん系の消毒薬
食品・飼料添加物に用い るプロピレングリコール		

(作成 畜産研究センター)